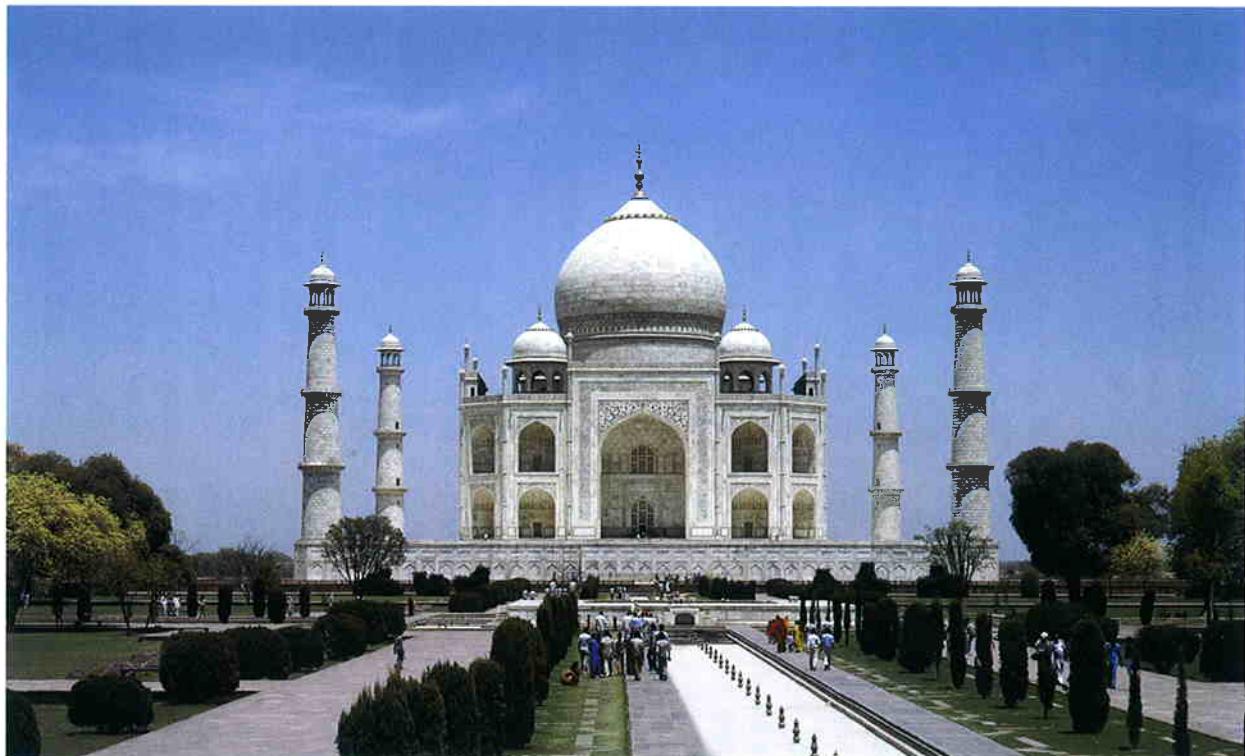


QueSerá,Será



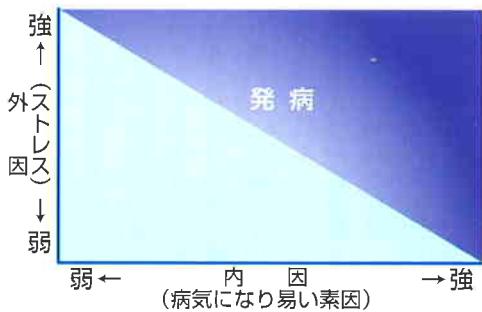
タージマハール 写真撮影：高子 忠雄

パニック障害は不安の病である。理由のない不安や、理由があつてもその程度に見合わないほど強い不安が生じる病気である。その病的不安の直接的で具体的な原因や理由は表面的には認められない。しかし、患者さんの生活史を垣間見るうちに、「ああこの患者さんはこんな大変な状況で長いこと苦しんできたのだ」となんとなく納得できる。このように多くの事例を観察していると、パニック障害の発症にはストレスが大きな役割を果たしていることが実感される。しかし、なかにはさほどストレスが有った様には思われない事例にも時に遭遇する。このことは、病気は外因と内因との相互作用で発症すると言う精神医学の旧来から

の考え方で説明される（図参照）。外因が強ければ内因はさほどなくとも発病し、反対に内因が非常に強ければ外因なしでも発病すると言う相互関係であります。外因とは一般的には、環境的な要因とか外傷や身体的病気を言い、内因は体質または遺伝的因素と

パニック障害発症の周辺

医療法人 和楽会 理事長 貝谷 久宣



パニック障害発症の周辺

考えられる。外因は言葉を変えて言えばストレスであります。ストレスと一口に言つても、心理的・精神的ストレスも有れば気温・気圧・湿度といった天候や疲労・空腹といったより身体的なものもあります。この図から言えることは、家族にパニック障害があるような人は外因、すなわちストレスがさほど強くなくとも体質的にパニック障害を起こしやすい人です。ここでストレスの影響を強く受けて発病したと考えられる事例を紹介しましょう。

だ夫と一緒にくらしていくま
す。この離婚は戸籍上だけの
ものだったのです。言葉を換
えて言えば、彼女は夫の実家
ク障害になつたのはB家と彼
女の間の困難な問題が山積し
ていたからだと彼女は言いま
す。エリートを育てた義母は
形式にこだわり、とても口う
るさい人でした。義父は多く
を語りませんが、頑固な銀行
員でした。夫の姉と妹は二人
とも伝統ある女子大を出て事
あることに嫁のA子さんの学
歴の低さを蔑むことに遠慮は
ありませんでした。こんな針
のむしろにおかれた生活が5
年続いたある夏の日に彼女は
パニック発作を起こしたので
した。発作を起こしてからは
夫はAさんに苦労をかけてき
たことを十分に承知していました
したから、彼女の多少の我が
ままも許してきました。今回
はその最大のものでした。離
婚をしたA子さんはさっぱり
した表情でクリニックに通つ
きます。あれほど頑固であつ
たうつ状態も次第に霧が晴れ
るように薄らいできていま
す。パニック障害の半数の患

者さんは大なり小なりうつを発症します。昔からうつ病は因習的な家族の間から出現することが多いと言われていますが、A子さんのパニック障害に伴ううつ病は家格の圧力によるストレスから生じたと言えるかも知れません。先祖代々、家柄、血筋、などという言葉が飛び出してくる雰囲気は個人の尊厳をしばしば踏みにじり、人間の幸せを台なしにするだけでなく、心の病気をも引き起こします。パニック障害は女性には男性の3倍も多い病気です。そしてその発病状況は、21世紀になつてもまだ夫の実家からのストレス一とりわけ、姑一嫁問題が最も多いように思われます。盆や正月が来るとうつ病になるパニック障害の患者さんは枚挙にいとまがありません。

夫の実家に帰り親族に気を使わなければと思うだけで息苦しくなつたり、胸が痛くなつたり、めまいが起こるといふ訴えはしばしば聞きます。パニック障害発症に関連するストレスで女性に2番目に多いのは障害児を持つことです。この場合、障害の程度はあまり関係がないよう

トレスは夫のプレッシャーです。夫から受ける束縛感は有言、無言に限らず結構多いと云うです。男性のパニック障害は発症ではやつぱり仕事上のストレスが最も関係深いと思われます。女性でも男性でもストレスにより追い詰められた状態がかなり長期間続き、これが以上耐えられない時点でパニック発作が出て発症します。普通のうつ病が頑張つて頑張つて頑張り抜いて一息ついてホッとしたりして発症するのと少し異なっています。

前にも述べましたようにはつきりしたストレスなしで発病する人達はどのように考えたらよいでしょうか。ひとつは本人がストレスを意識していく人もその患者さんの生体にとって大変なストレスが加わっていたということがあります。もう一つは、体質的にパニック障害になり易い人です。これは家族性、または遺伝性と言うこともできます。わたしのクリニックの調査では、パニック障害の患者さんは子供にパニック障害の人があり5人に1人は親、同胞、また

いいます。パニック障害は非常に家族性の高い病気です。現在までの研究ではパニック障害そのものの病気の遺伝子は見つかっていません。わかっていることはパニック障害になり易いことに遺伝子が関与しているらしいということだけです。生来的に過敏な性格で普通の人ならそれほど苦労しません。しかし、なぜか自分には感じないような人間関係にも強く反応してしまい悩み苦しむ人がいます。その結果ストレスが増大し、パニック障害を発症してしまいます。このような病前性格は、小さいときの環境により作られることもありますし、生来的に言葉を換えて言えば、素質的遺伝的に過敏なたちの人もあります。すなわち、環境と遺伝子は密接な相互関係をしているのです。

「パニック障害とともに」

H T

夫や子供たちが出かける朝が来る。身支度をし始めると泣いてはいけないと思いながら止められない。泣き顔を見せないようにするのが精一杯だった。地獄のような一日が始まる、一分一秒の時間の経過が苦しい。目に入つてくるものが全て、私自身と無縁のものなのだ。そのなかに自分をおいていることがどんなに辛いか、言葉にすることなど出来なかつた。それは、カーテンであり、テーブルであり、壁でもあつた。まずテレビを覗くことが出来なくなつた。買い物にいけない。乗り物に乗れないのである。あらゆるものからシャツアутがない。

らといって、家に一人でいるわけもなかつた。ただ、私、私を取り囲む家族や姉妹達の中にこのままどうにか時が過ぎていってくれるのであろうという種の焦りではなくあきらめの様なのが出てきた。そんなある日、夫が帰宅するなり一冊の本をさし出した。「お母さん、この病気はこれじゃないのかなあ？」差し出された本は「パニック症候群」目谷久宣著というものだった。聞きなれないその病名に一瞬身じろいだ。開いてみたくもあり、反面怖くもあつた。恐る恐る1ページ、2ページと捲った。アーチ、私の症状だ。これだ、これだ！私

た。涙が流れた。まるで、何年もの間
降り積もって硬くなつた雪が解けるよう
に、私は泣いた。それだけで十分だつ
た。その先生の一言で十分だつた。この
苦しみを分かつてくれる先生、いや私以
外の人がいた。席を立つ前に「必ず良く
なるよ。良くなりますよ。」二度繰り返
された。診察室を出た。夫と目が合つ
た。言葉も交わさず何もかも察したよ
うだった。薬と次回の予約をどうた。通
りに出ると夫が、「お腹がすいたから何
か食べようか?」私に聞いてきた。何年
ぶりだろう、外食するのは。オムライス
を注文し二人で向かい合つて食べた。話

通勤は、夫や子供たちの時間に合わせようとよくなり、ようとした。仕事をしていくても暇な時のようにした。仕事をしていても暇な時間があると、あーどうしよう!といった気持ちが出てくる。その後返しだった。しかし、確実に良くなつていった。すでに、あの怖い思いをして六年余り経つていた。初期の頃、人と接していくのも相手をまるで感情を持たないロボットのように感じるこもつたが、幸いにして人と接することが好きだったこともあり職場の人たちともうまくやつていただけた。しばらくして職場も家の近く

もあった。大声で言いたい、私は生きているよ。生きることは、それだけで幸分すごいことなんだよ！私が、出会ったパニック障害が私にもたらした物は、余りに大きかった。さまざまなものに対する考え方を変えさせた。

今、私は新幹線に乗っている。山口県の片田舎で年老いた両親が静かに生活している。一人で寄り添って過ごしていれる父と母に私の元気な姿を見せたくて、片道五時間の一人旅。そう、私の旅、私の人生の旅もケセラセラ。自分らしく人生を送りたい！

家の 中に 入つた。もう、その 家は 今ま
での 家と 違つて いた。そして、その 恐怖
は、私から すべての ものを 排除 した。こ
の 日が いつ だつたかい まだに 思い 出せ な
い。季節 さえ 覚えて いない。その 日か
ら、私 の中で 時間 が 止まつた。ただ、息
をして 生きて いる 私 だつた。
怖い、怖い、一人になりたくない。そ
して、矛盾 し て いる よう だ が、目に入る
もの すべて が 私には 無縁 だつた。受け
入れる こと が 出来ない。もちろん、家
族は 戸惑つた。理解 できるはず が ない。
私自身 そのときの こと を 言葉 に するこ
となど 出来なかつたので だから。

円宗教で救われるなら、入信してみよう、あらゆることに、ふらふらしながらさよなった。時はそうしながらさよなった。四時などない。ただ過ぎた。娘が私の手を握り「お母さんがどんな風に辛いかは私にはわからない。でもどうしようもなく辛い思いをしていることは分かる。御免ね、御免ね。」一人で泣いた。温かかった、あの柔らかい手の感触は今も覚えている。だから、私は生きた。

そして、数ヶ月、いや、数年が経つた。時間とはありがたいもので、私の苦しみも少しずつ慣れっこになっていた。だから、

赤坂見附の駅にたどり着いた。赤坂見附でリニックが六階であることを確認してエレベーターに乗った。こんな事はどうでもいいことだが、あのときの私の複雑な心境を分かつて欲しい。問診に答える、数分後に呼ばれた。「Aさん、どうぞお入りください」今も鮮明に覚えている。今まで尋ねた病院の雰囲気とは違っていた。何かに包み込まれたような温かさがあった。窓から陽光が差し込んでいた。貝谷先生の斜向かいに座ると、「あなたは、パニック障害です。辛かったね。死ぬほど辛かつたね。」その言葉を耳にしながら、アーチー私は救われると思つた。

健次失にして欲しい! これネクタイで私の首を絞めて! まるで駄々つ子のようにならぬ泣き喚いた。夫は、ただ私を抱きしめた。

年月はなんだったのかどうか?ノソノ障害と闘っている間に、子供たちは大きくな成長し、夫はその逆に白髪も増えていた。私は?長女が時々そばに寄ってきて何気なくこう訊ねる。「お母さん何とか生きていく希望がある?」即答出来ない。先日、又聞いてきた。やはり答えられない。すると長女は言った。「私の赤ちゃんが生まれたら、最初に抱いて欲しいのは誰でもない、お母さんよ。だから、今はそれを希望にして。」わたしの苦しい数年間を共にした、夫、長女、次女、そして私をいつも静かに見ていた愛犬。長かった。しかし短く

私は、ある日、ある時、たとえようのない恐怖感に襲われた。それが、私の人生觀を変えることとなつた。何かに押しつぶされそうな恐怖だった。屋内に一人でいた私は、その空間からただ、逃げ出そうと屋外に出た。サンダルを履いていたと思う。外もよく晴れた暖かい陽気だったように記憶している。自分をとりもどしふつと氣が付くと、少しほなれたらところに「近所の奥さん二人が話をしていた。私に気づき「Aさん、真っ青よ。どうされたのですか?」と声をかけてこられた。とうさぎ的に何か言つてごまかした。

された生活。そんな中で犬の散歩だけはするしかなかった。戸外に出たがる犬を放つて置くことは出来ない。道端の花も開りの風景も目に入らない。ふと小さなすみれ色の花を目にした。何も感動しない自分がいることに気が付いた。なぜ、なぜ、いったい何なの?この現象は?

近くの大学病院で受診した。「ストレスから来たものですね。この薬は眠気を催すので車の運転はしないように、眠くなるばかりで、何もしたくない。出来ない。恐怖に押しつぶされそう毎日。一回のカウンセラーを受け数万

はもう本を閉じた。結果がどうなるのか知りたくなかつた。私は本棚にもどした。しかし、その本が頭からなれることはなかつた。

一家に一人だつた。何故か本を手に取り読んだ。衝撃的だつた。「治るのだ、この病気は、治るのだ」心の中で叫んだ。すぐに、電話をかけた。電話つながつたところは病院ではなく相談窓口のようなどころだつた。相手の男性に今の私の症状を話した。そして、一ヵ月後の予約がとれた。

一ヶ月はあつという間にやつてきた。夫と共に約一時間半、電車を乗り換えて

家に帰つて相談しよう。「ぼんと言つた。次の回は、夫がどうしても抜けられない仕事があるので無理だと言つた。長女が、私が学校を休むから心配しないでといつてくれた。その頃、長女は大進学を控え路をどうするか一番大変なときだった。

に変えた。外で働くことを楽しいと思ふようになった。

結婚して以来、家事、育児、手を抜くことがない私だった。と、いうよりそれが精一杯だった。そんな私が外に出て働くことは思つてもいなかつた。実際、家は掃除が出来てない、食事も適当なものしか出来ない。家族も不満だったろう、私自身もそれが我慢できなかつた。いや、今はいいのだ。何よりも自分中心でいいのだ。もう自分を追い詰めるはやめよう、いつの間にかそう考えるようになつていた。

香道

文学散步(二七)

御家流桂雪会理事長

光源氏はその華麗な生涯に数えきれぬ程持ちましたが、その中で女性読者の殆んどから好感を持たれる女性は誰でしょうか。それは恐らく紫上と花散里ではないかと思われます。

花散里の姉麗景殿の女御は源氏の父帝の女御の一人であり、姉妹揃つて品の良い控えめの女性だったと想像されます。

花散里は取わけて美しくも多才でもなくむしろおつとりと平凡なひとでしたが、その素直で飾らない人柄に源氏は心安らぎ黙つて向い会つてい



花散里

「彼女に自分は実は光源氏なのだと打明けますと彼女は『そんな名前は聞いたこともない』ととぼけます。すると源氏は隠退してまだ何年もたたないのに自分はもう人に忘れられてしまつたのかとひどく自尊心を傷つけられ、それ以来気落して次第に

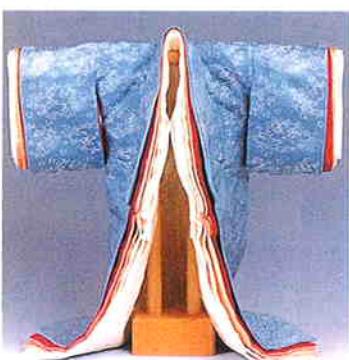
現のない形でい渡しにされる事があるという、日本人ならば容易に理解し得る長所を持つた人と思うのですが、そしてユルスナル程の鋭敏な作家ならばその点頭脳的には完全に理解した事でしょうが、とはいともこの部分はやはり皮膚感覚の相異みたいなものが感じられてその誤差がとても興味

この他にも江戸期の作品がありますがこちらも郭公の證歌を使って「白描」(線書)の絵巻のような淡い味わいで、散里の性格を投影したような静かな作品です。そして源氏物語の女性の人間性を深く信頼し、後年長男夕霧の後見役として世話をまかせます。

そして死の床で過去の想出の女性の面影を追いその名前を次々とあげてゆきますが、最後まで花散里の名は出ずそれ程印象の薄かつた女性であつた事に花散里は永遠に充たされぬ思いを嘆くという話です。』

勿論花散里の人生は華やかではなかつたけれど他の女性に比べて激しく愛されなかつた事に不満を持ち続けていたとも思えずむしろ「足るを知る人」というそれなりの充足感、東洋的な安息感を持つた人柄と思われますし、その無

ても少しも氣づまりでない
温かな雰囲気にひかれたの
でしよう。



紅の薄様(花散里の君)

表着には浅縞色三重林櫻地紋に海辺の風景(砂浜、松、波、千鳥)の文様を白で織り出した。源氏が、地味な感じがすると思い、添えた紅の小葵地紋の桂を紅の薄様重ねとしてコーディネートした。水色と紅の組み合わせが絶妙で、夏の御殿に住む花散里のイメージからすると、涼しい色調、柄はぴったりの色といえる。

佛羅西・マグリート ユダヤナル女史による英語「雲隱香」より。
著者和一郎翻訳

室町時代に興った香道はやはり同時代に盛に行われていた連歌と共に流行し、連歌師達も香に親しむ事が多かつたので、連歌の感覺は香道の中にかなり色濃く影響しています。

日本の代表的長編小説源氏物語を元にアカデミーフランセーズ会員の大作家ユルスナールが後日物語を書き、それを又日本人男性が組香に仕立てたというこの二段構造は、丁度連歌の付合のように一つのテーマを少しづつ作意をすらしながら異った個性が輪舞し表現してゆく過程を見るようでたまらない醍醐味です。ユルスナール女史も峯尾氏によつて自分の作品が香りで飾られた事を喜んでられると思ひます。

シリーズ 家族29

里子のしきたり

—母と“ばっちゃん”的回想から—

岩館憲幸

わが国の代表的な祭り、花輪ばやしで有名な秋田県、鹿角市花輪には昭和の初め頃まで、地主や商家では、生後間もない子を乳飲み子として近郊の小作農家などへ里子に出すしきたりがありました。里親には農家の出産間もない夫婦が選ばれました。里子は実子ときようだい同様分け隔てなく育てられ5~6歳で生家に戻されました。農家には相応の子育て費用が支払われていたものと考えられます。かかるしきたりはいつ頃からのもので、この地方にだけみられる独特のものだったのかどうかについては定かであります。

私がごとのつまらない話になってしまふのを覚悟の上で、老母ミヤの里子体験を、ちょっと変わった子育ての史実証言として敢えて取り上げたのは、秋田の県北、かつては南部の領地だった小さな城下町に、少なくとも昭和の初め頃まで続いていた里子のしきたりは、日本の家族史の中で特異なものと位置付けていいのではないか、そのことを一度誰かに尋ねてみたかったからでした。

大正4年8月農機具を商い

うだいの末っ子として生まれた母ミヤは、上の兄たちがそく里子に出されたのでした。ミヤが預けられたのは近郊の鏡田部落(村落の意)の大きな農家でした。ミヤは里親の実子と、前後して他家から預けられた里子と一緒に、同じお乳で姉妹のように育てられました。6歳になつて生家に戻るまで何度も実の母親に会わされても、母という実感はもてませんでした。生家に戻されて間もない頃、里親恋しさのあまり、数えの6つという幼さで一里の道のりを一人逃げ帰つたこともあります。

途中下駄の鼻緒が切れ泣いていたところ、通りがかりの見知らぬおじさんから腰の手ぬぐいを裂いてすぐ替えてもらつたことは、幼心にも地獄に仏の忘れられない出来事でした。

ミヤは生家では末娘ということもあつてかなり気ままに育ちました。特に父親(私の祖父)には可愛がられたようです。

卒業2年後、19歳で私の父道三と見合い結婚、その翌年私

果樹園も営む商家に、4人きよ

うだいの末っ子として生まれた母ミヤは、上の兄たちがそく里子に出されたのでした。ミヤが預けられたのは近郊の鏡田部落(村落の意)の大きな農家でした。ミヤは里親の実子と、前後して他家から預けられた里子と一緒に、同じお乳で姉妹のように育てられました。6歳になつて生家に戻るまで何度も実の母親に会わされても、母という実感はもてませんでした。生家に戻されて間もない頃、里親恋しさのあまり、数えの6つという幼さで一里の道のりを一人逃げ帰つたこともあります。

を生みました。

父は母の生地花輪町に隣接する鉢山町の小さな禅寺の住職でした。それまで人任せの多かった母にとつて、小さな庵寺とはいえ僧侶の妻・いわゆる大黒さんはとても気苦労の多いものでした。

結婚2年目の昭和11年、鉢山の津ダムが決壊、死者350人を越す大惨事となり、寺には次々と泥まみれの死体が運び込まれました。一歳の赤子だった私を抱え、おまけに身重であつた母には、父と一緒に夜を徹して湯灌(死体を洗い入棺する)をし続けるのは苛酷そのものでした。でも人一倍負けず嫌いだった母(母のすぐ上の兄、平三郎伯父から「ミヤっこ」は子供の頃から強情つ張りだつたからな)と聞かされたことがあります)はへこたれませんでした。

そんな折、母の様子を心配して現れるのが母の里親、『ばっちゃん』でした。母にとつていざという時一番頼りになり何でも相談できたのが鏡田の『ばっちゃん』だったので。

第二次世界大戦後の食料難時代に『ばっちゃん』から届けられるお米で何度も助けられたことか。当時鹿角地方では、乳

フクロウ博士の智恵袋

『睡眠障害の対応と治療ガイドライン』の12の指針

今回は厚労省の研究班から出された「睡眠障害の対応と治療ガイドライン」を紹介します。

- 1 睡眠時間は人それぞれ、日中の眠気で困らなければ十分
8時間にこだわらない、歳をとると必要な睡眠時間は短くなる
- 2 刺激物を避け、眠る前には自分なりのリラックス法
就寝前のコーヒー・タバコはさける、音楽、ぬるめの入浴など。
- 3 眠たくなってから床に就く、就寝時刻にこだわりすぎない
眠ろうとする意気込みが頭をさえさせ寝つきを悪くする
- 4 同じ時刻に毎日就寝
日曜に遅くまで床で過ごすと、月曜の朝がつらくなる
- 5 光の利用でよい睡眠
目が覚めたら日光を取り入れ、体内時計をスイッチオン
- 6 規則正しい3度の食事、規則的な運動習慣
朝食は心と体の目覚めに重要、夜食はごく軽く運動習慣は熟睡を促進
- 7 昼寝をするなら、15時間前の20~30分
長い昼寝はかえってぼんやりのもと
- 8 眠りが浅いときは、むしろ積極的に遅寝・早起きに寝床で長く過ごしすぎると熟睡感が減る
- 9 睡眠中の激しいイビキ・呼吸停止や足のびくつき・むずむず感は要注意
背景に睡眠の病気、専門治療が必要
- 10 十分眠っても日中の眠気が強いときは専門医に
11 睡眠薬代わりの寝酒は不眠のもと
- 12 睡眠薬は医師の指示で正しく使えば安全
一定時刻に服薬し就寝 アルコールとの併用をしない

シリーズ 家族29
里子のしきたり

乳母によつて子育てがなさ
れるというしきたりは、わが
国では深く根付いていたと思
われます。貴族社会や上級武
士社会では生母と共に同じ敷
地内に住まう乳母が子育ての
すべてを任せられていましたので
しょう。それゆえ乳母には、
乳飲み子である幼児に対し
て、生母以上にしつけや教育
の責任があつたのだと思われ
ます。一方鹿角地方の里親・
里子の関係は、乳母である里
親の家に預けられて、里親の
実子や、同時に預けられた他

わわわわきょううたいはとても、『ばつちやん』は実の祖父母以上に身近な存在でした。郷里の実家で行つた私たちの結婚披露宴で、わざわざ控え室の花嫁姿を見にきて、「おもしろい、おもしろい（鹿角方言で、嬉しい、良かつたの意）」と涙を流さんばかりに喜んでくれた『ばつちやん』の笑い顔は、最高のファミリーの顔でした。

飲み子として育てられ、実家に戻つてからも身内同様の深い付き合いのある農家から、米野菜の援助を受けていた商家は少なくありませんでした

の里子と一緒に分け隔てなく育てられるという点で、他では見られない特異なものだと

考えられます。

里親制度に関しては、歐米では実子がありながら家庭に

恵まれない子どもを養子や里子に迎えるのが普通である

子に過れるのが普通であるのに対して、日本の場合は子ども

もがないため、家の後継ぎとして養子や里子を迎えるとい

うのが一般的といわれております。それ故日本では欧米と

比べ、養父母・子にとって実の親子でないと分かつた際の

衝撃は大きいかもしません。それよりも最初から里

親・里子と割り切っていたほ
うが、かかる衝撃は少ないわ

けだし、家族がばらばらになつたり第二密着の過ぎるところが

たり近い密着し過ぎることか
起り難いのではないでしょ
うか。核家族化、子どもの熟
通い、未熟な親の再生産等々

A black and white portrait photograph of Dr. K. S. Yeo. He is a middle-aged man with dark hair, wearing glasses, a dark suit jacket, a white shirt, and a patterned tie. He is looking slightly to his left.

一九三五年秋田生まれ。
早稲田大学文学部哲学科卒業。
理学系中央病院精神科、航空自衛隊岐阜病院などを経て、現在は東海女子短期大学人間福祉学科教授。なごやメンタルクリニック心理カウンセリング担当。

今まさに家族は、家族の在り方そのものが問い合わせられて、いるといっていいのではないでしようか。

ないという報告があります。そういうえば秋田の田沢湖町を本拠地に全国規模で活動している劇団“わらび座”は団員の子どもたちを共同で育てていると聞いたことがあります。

家族のエゴを生みやすい状況が増えております。子どもや家族よりも自分の要求を優先してしまった親も少なくあります。実の親によらずとも愛せん。実の親によらずとも愛情さえあれば子どもは立派に育つものなのです。幼少時親から離れて、他者と交わる機会を持つてた子（0歳児保育等）は

●野鳥図鑑●



【チュウサギ】

ダイサギ・チュウサギ・コサギは一般にシラサギと呼ばれています。

チュウサギは数が少なく絶滅が心配されていましたが、近年は少し増えてきました。

撮影 (財)日本野鳥の会
岐阜県支部長 大塚之穂

INFORMATIONS

● 夏期休業のお知らせ

8月25日(月)～27日(水) 休診致します。

● クリニック関係図書出版案内

● 「人はなぜ人を恐れるか」

編著者：坂野雄二／不安・抑うつ臨床研究会編
出版社：日本評論社

● 「パニック障害に負けない

～不安恐怖症の体験・克服記～

編著者：貝谷久宣／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「強迫性障害～わかっちゃいるけど

やめられない症候群～

編著者：久保木富房／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「うつ病／私の出会った患者さん」

編著者：樋口輝彦／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「不安とストレス」

編著者：野村忍／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「パニック障害」

編著者：貝谷久宣／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「PTSD～人は傷つくとどうなるか～」

編著者：加藤進昌・樋口輝彦／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「対人恐怖—社会不安障害」

編 者：貝谷久宣
出版社：講談社健康
ライブラリーシリーズ

● 「摂食障害—食べられない、やめられない」

編著者：久保木富房／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「社会不安障害」

編著者：樋口輝彦・久保木富房／不安・抑うつ臨床研究会
出版社：日本評論社

● 「強迫性障害」

著 者：Padmal de Silva・Stanley Rachman
訳 者：貝谷久宣
出版社：ライフ・サイエンス

● 「脳内不安物質」

著 者：貝谷久宣
出版社：講談社ブルーパックス

貝谷先生の新刊

● 「パニック障害の理解と看護
～患者とその家族のために～」著 者：貝谷久宣
出版日：平成14年12月
出版社：医薬ジャーナル社

● 医療費の負担について

定期的に通院治療を行っている患者さんは、精神保健法第32条の「通院医療費公費負担制度」により、医療費を軽減することができます。御希望の方は、受付までお問い合わせ下さい。

QueSerá, Será 「ケセラセラ」

発行日 平成15年7月1日

【診療時間】

月	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
火	休診	診療(安田)		休診		診療(安田)		休診		休診		休診
水	休診	診療(貝谷)		休診		診療(貝谷)		休診		休診		休診
木		診療(土田)			診療(宇野)	(第1・2 ・4・5のみ)						
金	診療(井上)				診療(福原)							
土	診療(岡崎・金井)				心理カウンセリング(岩館)							
	集団行動療法(横山)				休	診						

※予約診療(日曜休診)



なごや
メンタルクリニック

発行者 貝谷 久宣
発行所 医療法人 和楽会
なごやメンタルクリニック
〒453-0015 名古屋市中村区椿町1-16
井門名古屋ビル 6F
Tel 052-453-5251 Fax 052-453-6741
ホームページアドレス
<http://www.fuanclinic.com>
E-Mail office@fuanclinic.com
印 刷 ヨツハシ株式会社
〒501-1136 岐阜市黒野南1-90
Tel 058-293-1010 Fax 058-293-1007
定 価 ¥500